

利休七哲

がもうじさと
蒲生氏郷 (1556 ~ 1595)

幼名：鶴千代

近江国蒲生郡の日野城主蒲生賢秀を父とし、会津若松九十二万石の大名。

秀吉麾下の有力武将

信長の人質となって岐阜城に預けられていたが、その才能に気付いた信長が娘冬姫を妻にさせたとされる

岐阜瑞龍寺の南化和尚に参禅し、三条西実枝、里村紹巴に和歌を習う。

非常に実直な人柄だった。

ほそかわさんさい
細川三斎 (1563 ~ 1645)

号：宗立、通称：与一郎、隠居後 三斎と名乗る。

桃山時代の武将。

細川幽斎藤孝の長男。

中津城城主 (三十九万九千石) のち豊前小倉城藩主。

最も忠実に利休の茶を継いだといわれ、利休臨終の際には阿弥陀堂の釜や茶碗、石燈籠などを与えたとされる。

ふるたありべ
古田織部 (1544 ~ 1615)

勘阿弥を父として生れる

三十代の頃に利休と出会い、戦塵にまみれながらも茶の湯の修業に励んでいた。

利休死後も茶の湯の修業に邁進し、次々に新しい試みを始め、秀吉から命を受け茶の湯を武家風に改革。晩年には三藐院近衛信尹の知遇を受けて歌道を極めた。また築庭にも造詣が深かった。

当時なかった茶碗に模様をつけるという革新的なことも行っている。陶芸家など芸術に携わる人々のよき理解者であった。

たかやまうこん
高山右近 (1553 ~ 1615)

幼名：彦五郎、別号：友祥 名：重友

高山飛騨守の子、キリシタン大名。

播州明石十二万石の城主。

秀吉の命により、キリスト教信者の改宗を命ぜられたが拒み、領地没収にあう。

この改宗の使者となったのが利休である。天下人の秀吉や師である利休の改宗にも屈しなかった気骨のある武人大名であった。

後に一時前田家に客分として仕えたが、家康によってマニラへ追放される。

まきむらひょうぶ
牧村兵部 (1545 ~ 1593)

齊藤伊代守利賢の次男として生れ、のちに牧村家に養子に入る

高山右近の勤めでキリシタンとなる。

ユガミ茶碗を使い茶席を行った人物として、茶の湯における創意工夫の能力が高かったといえる。
戦場にて病没。

せたくもん
瀬田掃部 (? ~ 1595)

近江国瀬田の出身ではないかと言われる

秀吉に仕えて従五位下掃部頭に叙任される。

茶が一風変わっており、たびたび人を驚かしたとされる。

高麗平茶碗「水海」(利休が名付ける)と茶杓「瀬田」を所持する。

文禄4年に豊臣秀次事件に連座して処刑されその生涯を終える。

しばやまけんもつ
芝山監物 (生没年不詳)

名：源内、俊一、宗綱

摂津出身

桃山時代の武人。初め石山本願寺に属し、のちに信長、秀吉に仕える。

茶湯での記録上の初見は天正九年二月十九日に山上宗二と津田宗及を招いて行われた。

天正十六年四月の後陽成天皇の聚楽第行幸に先駆けを務めた。

利休から贈られた長次郎作の黒楽茶碗「雁取」を所持。

普通の床ではかけられぬ軸を床の天井を上げることによって、その素晴らしい表具を壊すことなく掛けたという逸話が残っている。

利休から叱りつけられる事が多かったが、それも資質を見込んでのことだったといわれている。